
理有 炎天の刀を持つ少女

如月 理有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理有 炎天の刀を持つ少女

【Nコード】

N 8 5 9 9 X

【作者名】

如月 理有

【あらすじ】

紅那ノ国いんなのこくの民は長年の圧政に苦しんでいた。その最末端に位置する村で、姿峨しながは理有りあという少女に出会う。

理有はあちこちを放浪しながら、様々な人々に出会い、己の定めを知り、やがては革命を望むようになる。

炎天の刀を持つ少女の神異記。

<序章>

<序章>

夜闇の中で、そこはまるで明るい星のように輝いている。たくさん
の提灯と真ん中には大きなかがり火があつて、人々のざわめきと
太鼓の音が風に乗って流れてくるようだ。その中に、人々の楽しい
な笑い声が聞こえたように感じて、理有はギョツと目を瞑った。

夏も過ぎ去り、夜風も大分冷え込んできている。ぼろぼろになつ
た衣を一枚身にまとっただけの、5歳くらいのこの少女は、見れば
がりがりにやせ細っていた。その裸足は、山の中を何日かさ迷い歩
いてきたようで、傷つき血がにじんでいた。もう、一歩も歩ける気
がしなかった。

（おなががすいた……）

理有は鳥肌の立った腕で、膝を抱え込んだ。やっと見つけた村だ
った。そこへ行けば、食料が手に入るだろう。けれど、ここまで来
て理有は、進む意欲を失った。村はどうやらお祭りのようだ。だが
今の理有にとつて、それは遠い夢の中の出来事のように感じられた
からだ。

（とおい、とおい世界の、おはなし）

まぶしい。理有は心の中でつぶやいて、その手で村を隠そうとし
た。提灯の明るさが目に痛かったのだ。けれど、村の明かりは、理
有の小さな手の隙間から漏れ出してしまった。トン、トントン。太

鼓の音が、風にのってやって来る。

トン、カ、トンカカ。

芒^{すすき}が揺れる 穂^{こがね}が揺れる
実^{こがね}る実るよ 黄金の海だ
さあ 娘たち 舞い踊れ
白い女神が来る前に ああ
風とともに来る前に……

<第1章> 如月姿峨

<第一章>

扉を開けて、ふたりの男が入ってきた。異国風の黒ずくめの格好で、顔を頭巾で隠しており、いささかうろんな男たちだったが、周りの客も亭主も気にしなかった。なぜならここアシロ村は、それなりに豊かで活気があり、外から来た人間に対しても寛容だったからだ。（それは、山のふもとというよりも山の中にあるといった感じの小さな村にしてはめずらしいことだった）

アシロ村には、この山を越えてイギナという港町へ向かう商人などがよく立ち寄っており、人々は外から来た人間に慣れていた。もちろん、少し離れたところには街道があつたが、国の境目となる関門があり、訳ありの人々はこの村から山越えをすることを選んだのだ。

亭主はこの人達もそういった類の人なのだと思つと、注文を訊ねた。そのとき、酔った若者のひとりがいきなり立ち上がり、大声で歌いだした。

「ケツが揺れるぜ 胸も揺れる

酒だ女だ 祭りの夜だ

さあ 娘たち 舞い踊れ

白い夜明けが来る前に ああ

恐いおつ母ちゃんと来る前に」

黒い頭巾をかぶった男の一人が、それを聞くと顔をしかめながら、

銅貨を数枚出した。「ビールを」

「はいよ」と亭主は返事をする、ダン、とジョッキを二つおいた。後ろでは、さつき歌っていた若者が、周りの若者達に「なんだ、おまえいまだに母ちゃんが恐いのか」などとからかわれていた。

適当なテーブルに腰を下ろした黒ずくめのひとりが、頭巾を下ろした。現れた顔は意外と幼く、少年から若者になったばかりというようだった。16・7歳といったところか。明るい茶色の髪に色素の薄い瞳、そして端正な顔立ちに不快な表情を浮かべている。

「まったく、騒がしすぎますよ。よりもよって祭りの日に当たってしまふなんて。ねえ、如月さん」

如月さん、と呼ばれた男は頭巾を下ろさず、うなずきもしなかった。ただ腕組をして、何かを考え込んでいる様子だ。目の前の若者は慣れているらしく、話しかけるのをやめてビールに口をつけた。だがまたすぐに喋り出す。

「アチツ！ 如月さん、このビール熱すぎますよ。何ですかこれは！ もう……」

彼の名前は如月姿峨きつらひしなといった。また、目の前の若者は侑ゆきという。姿峨は黙ってビールに口をつけてみた。ああ、うまいなと思った。

「どうですか？ 味は？ 感想は？」

ぐつと身をのり出して、侑が訊ねてくる。まるで、侑が造ったみたいだなと思いながら、姿峨は正直に

「うまいと思うぞ」

といった。

「そうですか、やっぱり！……いや、俺がやっぱりっていうのもおかしいか。あれ、でもじゃあなんていったらいいんだろう。嬉しいんです？ お口に合って何よりで？？」

侑がひとりでぶつぶつと何かつぶやいているが、姿峨は一切気にせずに店の中を見回した。

店では、あいかわらず騒いでいる若者達に、周りの客が「そんなに娘がいいなら、外に出て探して来い！」といい始めた。彼らも祭りの日なので多少は寛容だったが、いうことはもつともだった。「ええっ」と洩る若者達は、便乗した周りの客にも「そーだ、外いてこい」といわれ、にやにやする大人たちによって店から追い出された。祭りは既に終わっていたが、村は余興に包まれていたので、外にはまだあの若者達のような人がたくさんいるのだろうと予想がついた。

その瞬間、ガシャーンという音と共に、人々の悲鳴が上がった。いきり立った怒鳴り声もする。どうやらこの店のすぐ前で起こっていることのようなのだ。周りの客も、なんだなんだと立ち上がった。

喧嘩か。と、姿峨は予想をつけた。ひとりが店から出て行き、それに釣られて何人もが野次馬をしに出て行った。侑も立ち上がった。きよろきよろとしていたが、姿峨が落ち着いた様子でビールに口をつけるのを見ると、再び座った。そして、脱力した様子で腕に頭をのせた。

「ハアー、やっぱり騒がしいですね。さすがは如月さん、微動だにしないし」

姿峨は、この若者に好感を抱いていたが、思ったことをすぐに口にしすぎるところが問題だと思っていた。そのとき、外の怒鳴りあう声が聞こえた。

「このっ、くそガキが！ 泥棒猫め！ どこから来やがったんだ！」

「ハンッ、どうせ親に捨てられたんだろう？ ああ、可哀想に、なあっ――！」

ドカ、ボクツと殴打する音が聞こえる。さらにその周りから、やつちまえといったはやし立てる声がする。姿峨はまゆをしかめた。外からさらに声がする。

「うるさいっ！ ぼくは捨てられたんじゃない！ 放してよ――！」

気になった点はひとつ。

「子どもか」

姿峨はビールを置くと、ゆっくりと立ち上がった。侑はその動作で察したようで、ぐだっていた体を起こすと、何もいわずについてきた。

外に出ると、かなりの野次馬が集まっていた。そして、野次馬に囲まれた中で、数人の大きな子どもたちが、小さな子どもを集団でいたぶっていた。周りの大人たちはざわついていたが、止めようとする者はいなかった。むしろ煽り立てる者さえいる。どうやら、こ

の村の子どもではないらしい。

「うるさいだと？ よくもその口でいえるな！ 泥棒猫の分際で！」

そのとき、小さい子どもが殴られながらも、目をきつく見開いていた。

「財布くらい、ちゃんと自分で管理できないのが問題なんだろう。なんでもかんでもお母ちゃんに頼ってるからだ」

見た目は5歳ほどだろうか。随分と、歳のわりに大人びた物言いをする姿は思った。

それは、あまりのことに、周りの子どもたちは一瞬口をあぐりと開けて、殴る手を休めてしまったほどだ。しかしそれは直後に、二倍の威力となって小さい子どもに降りかかることになった。

「なんだと!？」

「この、生意気な!!」

そこには、さっきまでのいたぶって遊ぶような影はなく、子どもたちの目は本気でいきり立っていた。舌を嚙んだらしく、殴られている子どもの顔面に赤い血が舞った。

「そこまでだ」

<第1章> 如月姿峨（後書き）

評価、感想、ビシビシお願いします!!><

政府の、犬

姿峨^{しなが}はそういうと、殴っていた子どもの腕をひねり上げた。子どもは、なにすんだよ！ と騒いで暴れたが、姿峨はあっさりと押さえつけてしまった。そして、同時に空いているほうの手で短刀を掴むと、他の子ども達の方へと突きつけた。今まさに姿峨に飛びかかろうとしていた子ども達は、驚いて動きを止めた。本当なら、今押さえつけている子どもを人質にでもとって脅せば最も簡単だが、子どもの喧嘩程度ではないと、さすがの姿峨も考えた。

「侑^{ゆき}」

姿峨はつぶやくと、いまだに壁に寄りかかったまま突っ立っている、小さい子どもの方を顎でしゃくった。指示を理解した侑は、その子どもの方へ寄って行くと、しゃがんで目線を合わせた。

「怪我はだいじょうぶかい？」

それは優しい声音だった。警戒心が薄い。優しいやつだ、と姿峨は心の中で肩をすくめた。

「え？ ……ううん、だいじょうぶ」

子どもが、かわいらしく頷いた。まるで、さっきまでとは別人のようだった。それを見て、姿峨の心にある疑念が浮かんだ。

しかし、それを掴む前に、自分が押さえつけていた子どもが動いた。完全に、よそ見をしていた不意をつかれたのだ。姿峨は心の中で舌打ちをした。子どもだと思って、油断していた。だが、しよせ

ん子どもがでたらめに手足を振り回しているだけ。姿峨は余裕で全ての攻撃を受け流し、再び身動きが取れないようにした。そのとき、腰に差していた短刀の一本が抜け落ち、カン……と音を立てたが、姿峨は気にしなかった。

はっ、と後ろで息を呑む音がした。

「お、お、まえ、達はっ」

高い子どもの声。

「どうしたんだい？」

侑の訊ねる声。

一瞬の空白。そして、空気が割れるような緊張と衝撃。次の瞬間、いじめられていた小さい子どもは叫び声を上げていた。

「触れるな！ 政府の犬が！」

ざわっと野次馬がざわめいたのを感じた。

（政府の、犬ね）

姿峨は苦い思いに顔をしかめた。

「な、なぜ、そんな。どうして分かった？」

訊ねる侑の声もだいぶん動揺している。ふと、姿峨は思い当たった。

「その、短刀の 모양が……」

やはりか、と姿峨は思った。さっき、姿峨が腰から落とした短刀にはある紋章が入っている。だが、まさかこんな子どもが知っているとは。意外だった。

「政府の犬って、まさか」

誰かがつぶやいた声がした。野次馬達の視線が、姿峨と侑にふりそそぐ。それは決して快い視線ではない。敵意のこもった視線だ。

「そう！ おまえ達のせいで、僕はこんな目にあってるんだ。親を返してよ！ こいつらが裏でいつたいどんなことをしてきたか。じやまな人間と見ればすぐに殺して、人々を恐がらせて。こいつらが悪いんだ、ぜんぶぜんぶ！ 政府のいいなりになって、いくらでも人を殺す悪党達なんだからっ」

「黙れ！！」

何が逆鱗に触れたのか。姿峨は自分でも驚くほど頭にきていた。小さい子どもに飛びかかると、腰に差した刀を抜きざまに切りつけた。

（！ 避けられた？）

だが、所詮子どもが、鍛錬を積んだ姿峨に勝てるはずもなかった。ほんの2・3秒で壁に追いつめると、姿峨は子どもを見下ろした。

そうして初めて、頭から水をかぶせられたように姿峨は冷静に戻

った。それは来たときと同じようにあつという間の出来事だった。目の前で吼えていた子どもは、ほんの小さな子どもだった。斜め後ろで、侑が面食らっているのが分かる。群集がざわめき立っている。姿峨は再び子どもを見下ろした。子どもは姿峨が見て初めて、その顔に恐怖を浮かべていた。そこから首筋に目を落とし、子どもが何かを首に下げているのを見つけた。それはなんでもない革紐だった。にもかかわらず、姿峨はなんだか胸騒ぎを感じてその革紐に手をかけた。

「あつ」

子どもが叫び声を上げる。姿峨はかまわず、それを子どもの首から奪い取った。「返してよ！」

姿峨は子どもの抗議を片手で制すと、革紐につながつていたものを見て眉根を寄せた。それは大きめの勾玉だった。くすんだ緑色をしている。

ふう、と息を吐いた。確信していた。こいつは、ただの子どもと違って、見過ごしていいものではない。

姿峨は勾玉をポケットに入れると、子どもをじつと見下ろした。子どもは、姿峨の足にむしゃぶりつき、殴ったり引っかかりたりしていた。

「大事な物のようだな。返してほしかったら、ついて来い」

姿峨はそう言って、その場を後にすることにした。子どもがすぐ後ろについてきた。少し間があってから、侑があわてて追いかけてきた。その場に置きざりにされた群集は、しばらくの間、身動きを

とることはできなかった。

政府の、犬（後書き）

評価・感想、ビシビシお願いします！><

鳥

姿峨^{しなが}は村を出ると、森を歩き続けた。あと一日も歩かず、森を抜けることができるだろう。

後ろを子どもがついてきているのは知っていたが、あえて気にしない振りをしていた。まるで存在しないように無視を決め込んだのだ。小さい子どもには酷な仕打ちだろうな、という思いもかすめたが、姿峨はそんなことを気にする人間ではなかった。次にこの子どもにどう接するかを決めるには、まず、これからこの子どもをどうするかを考えなくてはならなかった。

夜も更け、暁ばかりになる頃に、姿峨はようやく足を止めた。森を抜けたすぐふもとには、アシロ村よりも大きな村がある。そこには夕方に着けば良かったので、その前にここで一度休息を取ることにした。

「侑^{ゆき}、ここで休憩だ」

一晩ぶつ続けで歩いたので、侑はさすがに疲れた表情をしていたが、その言葉に元気よく頷くと、早速準備に取りかかった。雨が降る様子はなかったが、侑は二本の若木を寄り添うように結び付けると、口早に祈りの言葉をつぶやいてから、近くの木から枝を切り落としてきた。それを若木の周りに積んで、泥と落ち葉で簡素な屋根をつくると、簡素な家が出来上がった。

姿峨はその間に、水袋に水を入れに行き、帰りに弓矢で鳥を一羽狩るのに成功した。そして、家に着いたとき、鳥はまだ生きていた。姿峨は鳥の首を落とそうとしたが、急に手を止めると、少しためら

った。

(いや、あいつにやらせてみよう)

心を決めると、姿峨は短刀に手を伸ばす代わりに、懷に手を入れた。取り出したのは、勾玉だった。姿峨はそれを手に乗せ、もう一度じっくりとながめる。脩が起こしたたき火の光を反射して、勾玉はキラキラと光った。くすんだ緑は深い色をしていて、見方によって、また場所によって色が若干異なった。

魅入られそうになるのをこらえて、姿峨は顔をあげた。この勾玉が「あれ」であるのは間違いだらう。不可解なのは、なぜこれを、あんな子どもが持っていたかだ。姿峨は目を細めて子どもを見た。子どもはたき火の光が、ぎりぎり届くか届かないかのところにしゃがみこみ、こちらをじっと見つめていた。姿峨は、ふん、と鼻を鳴らした。ひとつ、あいつを試してみよう。

「ほら。これを返して欲しかったんだらう?」

姿峨は無造作に、ぽいつと勾玉を放った。子どもは大事なものを無造作に扱われて、かなり慌てたようだったが、心配ない。勾玉は一切の狂いなく、しっかりと子どもの手の中に落ちた。子どもは、ほうつと安心したように息をついた。

「ちょっと、こっちに来い」

手招きをするが、子どもは警戒した様子で近寄ってこない。イライラした姿峨は、「来い!」と、有無をいわさぬ口調でいった。子どもはびくりとふるえると、勾玉を両手でしっかりとにぎって、おそるおそる近寄ってきた。近くまで来ると、姿峨は「座れ」といっ

た。子どもは、姿峨の手が届く範囲に入らないように用心しながら座った。たき火の炎が、子どもの頬を照らした。姿峨はそこで、初めてこの子どもが少女だったことに気がついた。今まで、その口調と振る舞いにだまされていたのだ。けれど、今さら女の子だろうと大して違いはない、と姿峨は考えた。あえて上げるなら、この先訓練することがあったときに、男子よりも体力が劣るのが問題か。姿峨は子どもをじっと見据えていった。

「おまえ、鳥をさばいた経験は」

「ある」

子どもは、ちらつと姿峨を見上げた後、ぶすつとした調子でいった。

「やってみる」

姿峨はそういうと、子どもの前に鳥と短刀を置いた。そこへ、侑が

「なになに、子どもにやらせてみるんですかー？」

と、興味をしめしたらしく、近寄ってきた。子どもの近くにしゃがみこみ、じっくりと見る体制になろうとした。しかし、そこでいきなり、侑が素っ頓狂な声を上げた。

「え、ええ！？！？ うそ！！」

姿峨はため息をつきながら、一体どうしたんだと訊ねた。

「き、如月さん、大変です！ この子、この子女の子ですよ！」

姿峨はその返事を聞き、眉間をゆるめた。ああ、なんだそのことかと思った。

「それがどうかしたのか？」

「ええ！？　どうかした、って……。どうかしたって、いや、大問題ですよ！！」

「いや、だから何が大問題なんだ」

侑はまだ何かいつている。だが、姿峨は（まったく……）と思うと、目の前の子どもに視線を戻した。子どもは当惑している様子だった。けれど、姿峨が先をうながすと、文句をいいたげに見あげてきたので、にらみ返してやった。しぶしぶといった様子で、子どもがゆっくりと鳥に手を伸ばす。そして、触れたところで、びくっと体をふるわせて手を離れた。

「……あつたかい」

姿峨は肩をすくめた。

「そりゃそうだろう。さっき狩ってきたばかりだ。まだ生きている」

うう、と子どもがうめいた。

「やったことがあるんだろう、さっさとやって見せてみる」

わざと突き放すようにいうと、子どもは短刀を手ににぎった。しかし、その手は頼りない。鳥が最後の力をふりしぼって、ばたばた

とあばれた。子どもは悲鳴をあげて、鳥から手を離した。だが、姿峨は何もいわずに、見守ることにした。

子どもは、悪戦苦闘していたが、やがて鳥の首をつかむと、短刀を押し当てた。そして、力を込める前に大きな声でいった。

「日の神月の神、森の神々よ。この鳥の魂がどうか安らかに眠らんことを！」

短刀は鳥の首をすぱりと切り落とし、鮮血が飛び散った。子どもは、痛みをこらえるように顔をゆがめていた。

（日の神月の神、森の神々、か）

姿峨は子どもの祈りを心の中で反すうしていた。それは、このところ聞かなくなった、古い祈りだった。

子どもは、鳥の足を持つと、逆さにして血が抜けるのを待った。抜け切ると羽をむしり取り、それが終わると内臓を抜きにかかった。姿峨は手伝おうとしたが、子どもに断られた。慣れてはいないようで、子どもの作業はのろく至らない点多かったが、けっきよく、子どもは最後まで一人で鳥をさばききったのだった。

日はすでに昇りきっていた。子どもは川に手を洗いに行っている。姿峨はたき火で熱くした石を使って、皮の袋で調理をしていた。ここまで来る間に摘んだ山菜と子どもがさばいた鶏肉を使って、シチューをつくるつもりだった。そこへ、子どもがいない隙を見計らって、侑が声をかけてきた。

「すごい子ども……でしたね」

そうだな、と姿峨はいった。

「気に入ったのですか？」

「ああ。見込みはある。月影の館に連れて行って、鍛えようと思う」

それに、勾玉のことも気になるしな、と姿峨は心の中で付け足した。なんにせよ、いろいろと気になる子どもだった。

子どもが帰ってきたころには、シチューはいい感じに出来上がっていた。いいにおいが辺りにただよっていて、空腹のお腹に食欲を誘った。さらに、もも肉を串に刺してたき火で直接焼いていたのだが、それがキツネ色になって脂をしたたらせているのがたまらなかった。3人は口々にいただきます、と感謝すると、食事に取り掛かった。木の器によそったあつあつのシチューも、鶏肉のうまみがよく出ていた。子どもも、ほっぺを赤くしておいしそうに食べていたのを覚えている。

食べ終わると、3人はすぐに横になった。子どものぶんの紙子*はなかったので、自分の分をゆずると、姿峨は丸くなって寝ころがった。寒かったが、眠れないほどではなかった。眠りに入る直前、姿峨は子どもの名前を聞き忘れたなあとぼんやりと思った。

運命の齒車が、かちりと音を立てて回り始めたような、何かが始まる予感があった。

鳥（後書き）

* 紙子・・・紙子紙という和紙で作った衣。保温性にすぐれる。奥の細道で芭蕉も使っていた。

<第2章> 如月理有

理有は拗ねていた。

「おなかがすいた」

理有は腕を組んで、つんとして見せた。

「そこをなんとか、ガマンして」

彼の言葉に、くちびるをゆがめる。胸の辺りがひどくむかむかして不快だ。

「つかれた」

「もうちょっとだから。きつとすぐに帰ってくるから」

理有たちは今、門の前につっ立っているのだが、足はしびれてくるわ、人が多いわ……。

そう、人が多いのがいけないのだ。うるさいし、なんだか蒸し暑いし、なぜだかみんなじろじろとこちらを見ってくる。何がそんなにめずらしいのだ。おなかすいたし。というか、そもそも、

「姿峨はいつになったら帰ってくるんだーっ！ もうやだ！ 侑ゆきとふたりきりだなんてたえられないよ！」

「……くっ。俺だって、こんなガキとふたりきりだなんてこっちか

ら願い下げだ！ まったく、如月さん、早く帰ってきてくださいよ、ほんと……」

ふたりの魂の叫びがじつにやる気の無いため息とともに流れ出たとき。

「なんだ、おまえたち。ずいぶん俺の帰りを待ちわびてくれていたようだな。めずらしいことに」

後ろから、聞きなれた低い声がした。

「あつ、如月さん！」

「あつ、姿峨——！！」

侑のわきの下をくぐり抜けて、姿峨のふところに飛び込んだ。

「姿峨、聞いて！ 侑ったらひどいんだよ。あのね」

理有は姿峨に抱きついて、いままでのことを姿峨に告げ口しようとした。が、それを侑がさえぎった。

「何がひどいんだ！ 俺があれだけ気を使ってやったのに！ むしろひどいのはおまえだろ」

「だって侑つまんないし」

「なにおうー！？！？ おまえ、ガキのくせに生意気なんだよっ」

「あのー」姿峨が、ふたりのガキの口げんかの仲裁にまわろうと口

を開いた。

「ふたりとも。わかったから」

だが、その瞬間ふり返った理有と侑は、同時にそもそもの原因を思い出し、その矛先を姿峨にむけた。そして、同時に叫んだ。

「そもそも！ 如月さんが遅いのがいけないんです！！」

「そもそも！ 姿峨が遅いのがいけないんだよ！！」

ふたりのあまりの気迫に、姿峨は思わず一步下がると、「はあ」とため息をついた。

ちゅーつと吸い上げると、あまい汁が口じゅうに広がった。ごくんと飲み込むと、今度はその冷たさが胸から全身に染み渡ってゆく。口にはさっきのあまさと、何ともいえない香ばしい果実の香りが残っている。さっきの快感をまた味わいたくて、理有はまたストローから汁を吸い上げた。

一気に半分ほど飲み干したところで、理有はやつとまわりの状況を感じられるようになってきた。姿峨と侑が話している。どうやらさっきの門の中で何があったかを、姿峨が侑に話しているようだ。あまりいい内容ではないらしく、ふたりとも気難しそうに眉間にしわが寄っている。だが、理有が見ていることに気がつく、ふたりは話すのをやめて、こちらを見てきた。

「うまいか？」

という姿峨の問いに、理有は満面の笑みを浮かべた。

「この汁、すつこーくうまい！」

「汁じゃねーよ」と、侑が苦笑しながらのぞき込んできた。「ジュースだ、ジュース。ずいぶんと夢中になって飲んでいたな」

理有は、なんだか子どもだとバカにされたような気がして、くちびるを尖らした。そして、ふと侑のジュースが既に空なことに気がついた。

「くふふつ。そんなことって、侑のはすでにカラじゃん！」

それに対して侑がなにかいい返そうとしたのを、姿峨がさえぎった。

「まあ、おいしかったようで何よりだ」

じつはあの後、長く待たせたお詫びだといって、姿峨がジュースをおごってくれたのだ。冷たく冷やされた、異国のものだというそれは、さまざまなものが行きかう都だからこそ手に入る貴重な物だった。

「あ、そうだ」

何かを思いついたらしく、姿峨がふところをさまぐった。そして、きつちりと折りたたまれた紙の束と筆を取り出すと、さらさらと何かを書き始めた。書き終わるときつちり封をして、理有に手渡した。

「都での用事も終わったし、これでやっと月影の館に向かえる。理有にはそこで訓練を受けてもらうが、月影の館に着いたら、総長であるヒヨノのところへこの手紙を持っていけ。あと、いいか、これ

から名前を聞かれたときには、如月理有と答えるんだ」

姿峨しながの言葉に、理有はうなずいた。理有が如月理有になろうと、大した違いはないと思った。理有は手紙をふところにしまった。

「さて、行くか」

そういつて、姿峨と侑は立ち上がった。

「ま、待つて」

理有はあわてて残りのジュースを口に含んだ。

いよいよ、月影の館に向かうのだ。

<第2章> 如月理有（後書き）

評価お願いしますm（）m

民宿の朱那

月影の館というのは、じつに山奥にあった。

「……これが、館？」

理有はまゆをひそめて姿峨を見あげた。どうみても、小屋だ。小さいというほど小さくもないが、少しも大きくなくて、なんと言うか……民宿だった。館というのがどんなものかいまいち分かっていなかったものの、少なくとももう少し大きくて立派なのを想像していた理有は、ため息をついた。

それを見て、侑^{ゆき}が、くすつと笑った。

「なにがおもしろいんだ」

理有が不機嫌に見あげると、侑^{ゆき}は慌てて笑みを押し隠した。

「別に、なんでもないさ」

姿峨は何のためらいもなく、その”館”に入っていた。入ると、受付のような場所があり、くたびれた男がひとり座っていた。人が入ってきたときは顔を上げたけれど、なにもいわずに黙っている。

「103号室」

姿峨が男に向けていった。

「何泊？ 用件は？」

男が不機嫌そうに問う。

「3泊。きのこの採取かな？」

姿峨の声に、少しおもしろがるような色が含まれたことに理有は気がついた。男は値踏みするようにぎろりと姿峨を見たあと、後ろをふり返り、

「おい、朱那しゅうな、こいつらをちょっと」

といった。すると、「はい」と明るい声がし、奥からのれんを押し上げて可愛い少女が現れた。15歳ほどだろうか。明るい笑顔が印象的で、洗い物でもしていたのか、濡れた手をエプロンで拭っていた。だが、その瞳がこちらを見ると、一瞬揺れたようだった。理有は違和感を感じて、首をかしげた。

（たぶん、見てたのは侑だ）

そう思って、理有は侑のほうをそつと見あげたけれど、侑はそっぽを向いていて、表情には何の変化もなかった。

「103号室ですね？ 私がお連れいたします」

朱那のその声や表情には、さっき一瞬瞳が揺れたことなど、まるでなかったことのようになっている。

理有たちは朱那について廊下を歩いた。木の板を敷き詰めてある床は、歩くたびにぎしぎしと音がした。

「こちらです」

それは一番奥の部屋だった。ふすまを横に押し開くと、畳の部屋があらわれた。理有たちを先に入れ、ふすまを閉めると、朱那が口を開いた。

「まず、身分の証明を」

それは、今までの声と違い、うって変わった低い声だった。

姿峨は腰につけた短刀を前に出す。それは、前に理有が騒いだ、政府とのつながりを示すものだ。

「他のふたりは。ないのなら、血を」

無感情な冷たい声で、朱那は驚くべきことをいった。

（血？）理有は、驚いて目を見開いた。本当なのだろうか？

だが、侑はうなずくと、目の前で短刀で自分の指先を突いた。侑の真っ赤な血がにじみ出てきて、短刀をいくらか伝うと、朱那が出した器に数滴したたった。

理有は助けを求めるように姿峨と侑を見たが、どちらも目をあわせてはくれない。それで、これは自分で解決しなければならないんだと悟った。

「……侑」

呼ぶと、侑は何もいわず、すぐに短刀を貸してくれた。理有は目

を閉じた。一度深呼吸をする。そして、目を一気に開くと、短刀を指先に突き刺した。その間は何も考えず、行為だけを行った。やってみると、確かに痛かったが、それほどのもではなかった。

ぽた、ぽたつと血がしたたった。

そのとき、頭に、ぽんと手がのった。姿峨の大きくてごつごつした手だった。

「えらいな」

そのひとことをもらえると、あとはどうでもよくなって、理有はにつこりと微笑んだ。

それが終わると、姿峨はまっすぐに朱那を見据え、いった。

「我々は、政府の犬だ」

その言葉には、理有は知らない何かの意味があるらしく、朱那はゆっくりとうなずいた。「了解です」 なにか合言葉のようなものだろうかと思つた。朱那は深々と頭を下げ、そしていった。

「おかえりなさい、如月様。あと、侑」

今度の声は、今までのどちらとも違い、敬意の念と深い温かみのこもった優しい声だった。理有はそれは大人の声だと思つた。

「ああ、ただいま」姿峨はめずらしく、少し安心している声音でいった。

「俺は”あと”ですか。はいはい、どうせおまけみたいなもんですよー」

侑はぶつくさいいながらも嬉しがっているらしい。ふたりの安心した様子を見てみると、やはりここが「月影の館」なのだろう。

そのとき、朱那が思いがけない言葉を口にした。

「さて。ではそろそろ月影の館に参りましょう」

理有はに、えっ！ と思った。そして、驚きのあまり思わず、大きな声で訊ねてしまったのだ。

「ここが月影の館じゃなかったの!？」

それは思ったより大きな声で、部屋中に響いた。とたんに、3人がばっ、とこちらを振り返った。理有はさらに驚いてしまい、3人の瞳を見返すばかりだった。

「静かにしろ」

姿峨のその声は、低くて威圧感があり、とても逆らってはいけなような声だった。理有はびくりと縮こまり、こくこくとうなずいた。何か、大声でいってはいけないことを口にしたらしいことに理有も気がついていて、そのせいでしばらく、気まずい時が流れることになった。もしかしたら、理有がしばらくと思っただけで、実際は一瞬のことだったのかもしれないが。

それを破ったのは朱那だった。朱那は立ち上がると、部屋の端の畳の辺りをややさまぐったあと、畳の一枚をはがした。そして、そ

の下にある木の板もはがした。すると、下には空洞が現れた。真っ暗なので理有はまゆをしかめたが、きっとそこを通って行けという事なのだろう。

予想は的中して、姿峨と侑と理有の3人はまもなくその空洞の中にもぐりこんでいくことになった。

空洞はトンネルになっていて、姿峨と侑は既に先に行っている。理有は暗闇が嫌で、なかなか足が進まないでいた。後ろは、トンネルの入り口から刺す明かりでまだ明るい。理有は未練がましく後ろを振り返った。するとそこには、朱那がお辞儀をして見送っている姿があった。理有がじっと見ていると、朱那は少し頭を上げ、小さくつぶやいた。

「侑……心配、したんだから」

それはあまりに小さい声だったから、侑に届いたかは分からない。けれど、理有はなんだか、少しだけ嬉しい気持ちになった。そして、さっきまで暗闇を嫌がっていたことなど忘れて、よつんばいのふたりを追いかけて先を急いだ。

民宿の朱那（後書き）

評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599x/>

理有 炎天の刀を持つ少女

2011年11月9日03時15分発行